
児戯——こどものたわむれ——

須田 継

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

児戯——こどものたわむれ——

【Nコード】

N8395J

【作者名】

須田 継

【あらすじ】

書き手が書き手のために全力で遊んだ代物です。

作品が面白いのか？ 作品が作品として成立しているのか？ そんなもの

の二の次に書いています。真剣なモノを読みたい真剣な方にはおすす

めできません。それでも一緒に、楽しんでみませんか？
なお、何を使って遊んでいるかのヒントは『カガミ』です。

死は天使の如き神々しさで舞い降りて

白で埋め尽くされていく故郷を見て、どうにも耐え切れなくなつた。

「どこに行くんだ！」

無意識のうちに足は故郷の方向にむいていた。それを、親友――ビリーの腕が止める。彼は首を横に振った。

「お前は残れ。それが妥当だろ」

英雄として祭り上げられた俺は、両軍壊滅と言う事態に陥っても旗として必要だ。だが、コイツの方が俺よりも正確に状況を分析できる目を持っている。故に、出した結論は否だった。

「ダメだ」

俺の言葉に、ビリーは心底驚いたような顔でこちらを見ていた。

「オレが行く。お前、俺の代わりをやってくれよ」

「何言ってるんだ！」

ビリーが俺の胸倉を掴んで睨む。その目に、涙が溜まっているのを見て、自分の思いが相棒に伝わったことを自覚した。

こうなってくると自軍が壊滅した事自体が幸いしてくる。俺の声と顔を知っている人間が、今この場にいるお互いだけなのだ。

つまり、やろうと思えば、『英雄は二人』になれる。

運良く俺が戻ってこれれば、俺が旗のままであり続ければ良い。

運悪く俺が戻ってこれなくても、端から英雄は目の前の相棒だったことにすれば良い。

「後、頼んだぜ？」

掴まれた手を引き離す。予想以上に、その手には力が入っていなかった。お互い、疲れていたんだと思う。

掴んだ手に熱い雫がぱたりと落ちたが、それになるだけ気付かないようにしてビリーの胸に無理やり手を引かせた。そして相棒の手から手を離すと、俺は思いつきり殴られた。

知略担当の相手から、そんなある種の高等技術を拝ませてもらい、俺は面食らったまま地面に転ぶ。受身が取れたのは天才的な反射神経の賜物としか言いようが無い。

だが、受身を取ってしまってから、もっとともに喰らってやるべきだったかと反省する。――案の定、相棒は無表情なまま怒気を膨らませていた。

だが、深紅の両目に涙をいっぱい溜めている姿を見たら、俺はどうしても顔が緩んじまう。

俺が笑ってしまったのを見て、相棒は背を向けて歩いていつてしまった。アイツが予定通りの逃亡ルートに入っていくのを横になりながら見送り、そして起き上がる。

一台だけ残されたバギーを見やって、俺は目を伏せた。

雪のような粉が降っていた。

でも、コレが雪でない事を俺は知っている。コレは、死の灰だ。

ふわりふわりと降りて来て、いくつかは俺に触れてから地面へと吸い込まれていく。

「綺麗……だな……」

悲しいほどに。

空には暗雲が立ち込めて、日の光を全く通さないのに、大地だけが白くなっていく。

一步、踏み出した。ぐしゃりと空洞のある砂をつぶすような感触が足から伝わる。

足元を見れば、ソレが元は人間の形をしていたのがわかった。

片膝を付いて、人の形をしていたそれに触れる。無残に、崩れた。もう、山のような形にしか残っていない。

真っ黒な砂と、降り注ぐ白い灰が混ざって、そこだけおかしい色になった。

かつて、ここには暖かな生活があった。
かつて、ここには人々の声があった。
かつて、ここには自分の故郷があった。

それらはどこか遠くに行ってしまったように思える、冷え切った
光景。

「どうして」

誰にでもなく、呟いていた。手にした砂は、人の温かみがあるよ
うな気がした。

「お前がやったんだろうが」

頭の中で、戦友の声が浮かんで消えた。

雨が降っていた。白い雨が。

この兵器はその爆発の威力よりも、その後の威力の方が凄いのだ
と、研究者達が笑いながら話していたのを思い出す。それが酷く、
薄ら寒かった。

ゆらゆらと視界が揺れた。それに、自身の限界を感じる。

ああ、あの賢く愚かな研究者達の目論見どおり、この生きている
モノを蝕む力は凄まじい。まさに、死の力だ。

でも、戻る約束もした。だから、生き延びてやる。

けれども、俺もやがて壊れていくのだろう。

戻れたとしても俺は俺ではないのだろう。

死は天使の如き神々しさと舞い降りて（後書き）

読んでいただきましたして、まことにありがとうございます。

まずは世界観が謎過ぎるこちらから。

この『児戯』は、二つで一つの作品です。最初から単品で楽しむことは出来ない構造となっています。

ですので、どうぞ次の作品もお読み下さい。

天災は悪魔の如き禍々しきで現れて

何と言うか、目の前は地獄絵図と化していた。脇でも白いタキシードに身を包んだ親友――康太が若干震えている。

「お前がやったんだろうが」

康太が指差す先には空になったウイスキーのボトルが無残な姿になっていた。

「どうして」

ある種納得がいなくて、俺は思わず呟いていた。

地獄絵図の中心で白いドレスを振り乱して笑っている鬼子母神の如き人物は、主役であるはずの康太の花嫁だった。全然アルコールに手をつけようとしないう彼女に、俺がこっそりウイスキーを半分ぐらい注いってしまったのがそもその間違い。もちろん、止めにかかる康太は他の仲間が押さえつけていた。そして、この大惨事。

最初の異変は彼女が唐突に大笑いし始めた事。笑い上戸なのかと楽しくなった周囲に冷たい風が吹いたのは数秒後だった。彼女はおもむろに手近にあったウイスキーを空にした。ボトルを持って飲み干す事で。

そしてそのボトルをテーブルに叩き付けた。もう周囲は完全に凍りついた。

飛び散るガラスを見つめて彼女は呟いた。

「綺麗……だな……」

言った彼女が次にとったのは、他のボトルを飲み干す事。そして、油断しまくっていた康太の父親の頭をかちわる事だった。血が流れまくっていいように、辛うじて生きている事が素晴らしい。

康太が笑って俺の肩を叩いた。いくらかその顔が恐怖に引きつっ

ている。

「後、頼んだぜ？」

「何言ってるんだ！」

本気で非常口に逃げ込もうとするコイツを、俺は『柔道の時にこれぐらいの力が出せれば成績が良かったのに』と思うような力で引き止める。首をきめる事で。

しかし、思わぬ声が別のところから振ってきた。結婚式の司会をやっていた雅樹だった。

「オレが行く。お前、俺の代わりをやってくれよ」

コイツ、俺を司会にして自分は逃げようってのか。許せねえ！

「ダメだ」

泡を吹いている康太をさっさと捨てて、俺は雅樹の足を綺麗な足払いで払ってやった。そりゃもう、見事に後ろにステーンと倒れる。頭を押さえている雅樹を見下ろして、俺は笑った。

「お前は残れ。それが妥当だろ」

司会なんだから。

俺は自動ドアへ向かって歩き始めた。

「どこに行くんだ！」

雅樹の叫び声が聞こえる。

んなもん、あの花嫁が来られない場所に決まってるだろ。

天災は悪魔の如き禍々しさに現れて（後書き）

最後まで読んでいただきまして、まことにありがとうございます。ここまで読まれた方には私が何で遊んだのか、もうお分かりでしょうね。一応、念のために書きますと『台詞の配置を逆転させる事』です。

全く違う二つの話で、使用する台詞は同一のモノ。しかし、その配置を逆転させて構成しています。

ただひたすら『台詞の配置を逆転させる事』に重きを置いているため、自分で書いていて何ですが、設定も構成も無茶苦茶です。ですが、どうぞ『子供の戯れ』と思って許してください。

まさに『児戯に等しい』小説ですが、面白いと感じてくださったなら嬉しく思います。

では、この作品は『戯れ』ですから、今回はご感想をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8395j/>

児戯——こどものたわむれ——

2010年10月10日00時02分発行